

西播磨地域・ひとはく連携研究会

岩槻 邦男 (ひとはく館長)・大本 晋哉 (兵庫県教育委員会)・岸本 秀子 (佐用郡教育委員会)
黒田 武彦 (兵庫県立大学 自然・環境科学研究所)・桜井あかね (ニットネット代表)
世良 智 (一宮町森のゼロエミッション推進室)・高野 温子 (ひとはく研究員)
田中 哲夫 (ひとはく研究員)・辻井 博 (兵庫県西播磨県民局)・中瀬 勲 (ひとはく副館長)
波多野哲哉 (朝来市教育委員会)・原田一二三 (上郡土木事務所)・東山 真也 (上郡中学校)
藤本 真里 (ひとはく研究員)・横山 正 (佐用高校)

本稿は2004年11月27日に西播磨で開催した西播磨地域とひとはくとの連携を探った座談会の記録である。

1. 趣旨説明 (田中)

西播磨ではすでに多くの市民の方が活発に環境教育活動に取り組んでいる。今日のメンバーでかかわっている方もおられるが、「千種川圏域清流づくり委員会」は兵庫県でもっとも進んでいるグループだと思う。主体として動いている方々、県民局、学校の先生との連携がうまくいっている。立ち上げから5年が経ち、新たな展開が望まれている時だろう。今日は、西播磨地域のことを教えてほしいと思っている。

ひとはくキャラバンもそうだが、博物館は兵庫県下のいろんなグループとの連携を深めてゆきたいと考えている。皆さんの活動をさらにステップアップするためにはどうしたら良いのか、博物館が手伝えることはないか。グループの方が得をし、博物館との連携を深めるきっかけになればと考えている。

2. 自己紹介

岩槻：ひとはく館長。本職は放送大学だが、木・金曜日ひとはくに来ている。

田中：ひとはく研究員。連携事業で外部団体、学校、企業との連携を担当。

波多野：山東町中央公民館職員。今年は山東町でひとはくキャラバを開いた。

高野：ひとはく研究員。企画調整事業推進担当。

藤本：ひとはく研究員。2年目と3年目のキャラバンを西播磨で開き、この地域とのつながりが深い。今日の集まりは「コア連携」として、非常に重要な位置づけとして考えている。

櫻井：ニットネットという自営業。市民と行政、市民と企業とのコーディネートを編集という切り口でおこなっている。

大本：以前は高校教諭、現在は兵庫県職員。ひとはくの担当をしており、今日の研究会を楽しみにしている。

東山：上郡中学校で理科を教えている。

岸本：佐用郡教育委員会職員。今日は勉強させていただきたい。

世良：一宮町森のゼロエミッション推進担当。まちづくり、地域資源循環、新エネルギーの3本柱で進めている。

黒田：西播磨天文台。ひとはくから得たヒントを天文台へ活かしていきたい。

横山：佐用高等学校教諭で生徒指導部長。いろんな会に出るとどこでも同じことを話しているので、一つにならないものかと思っている。

3. ひとつはくの生涯学習（岩規館長）

ひとつはくの思想の根本は「生涯学習」につきる。生涯教育と生涯学習との違いは何か。兵庫県生涯学習審議会、文部科学省生涯学習審議会、または広辞苑の見解は必ずしも一致していないが、簡単にいうと生涯教育＝社会教育、生涯学習は学ぶ人が主体である。日本の教育は「教える」という要素が強い。ゆりかごから墓場まで、人は知的な活動をするもの。僕は、受精卵から墓場までという生物学的な見かたをしている。生涯学ぶという中に生涯教育、生涯学習があり、胎教、幼児教育、学校教育がある。

僕が博物館にコミットしてから今年で8年目。前の職場だった東大植物園では社会教育について考えて、教育から学習への転換を強く発言してきた。実践活動として博物館に関わったのはやっと2年目である。

ひとつはくは新展開を考え始めてから3年目であり、それは僕の考えと合致していた。ひとつはくの将来計画を若手スタッフで作る「ネクストミュージアム・プロジェクトチーム」に楽しんで参画させてもらっている。



博物館の仕事は、学ぶことへの手ほどき

30、40年前の博物館に対する考えは、まずは建物を建てることだった。落ち着いてくると少数の学芸員が置かれるようになったが、役割は標本の整理と展示の説明が期待され、学芸員の資質はあまり問われなかった。外国に行くと国際会議に出てくるメンバーのほとんどは博物館スタッフだが、日本ではそのような役割を博物館に期待していない。そのような歴史が長くあり、博物館は物が置いてあるうす暗い所とされている。

そういう中で博物館は何をしていくのか。人は生まれながらにして学ぶというが、そうなるためには何か支援が必要である。ヨーロッパの知人達になぜこの分野に入ったのかを尋ねると、多く人はピクニックに連れていってもらい、花や植物の面白さを教えてもらったという経験を語る。（自然科学を）専門にしていなくても同じ経験をした人は多い。ベースとして知的活

動の素地を持っている人はたぐさにいる。お母さんや叔母さんやお姉さんに手ほどきを受け、その手ほどきが意味を持っている。学ぶということには、教えるのではなく手ほどきが必要である。博物館の仕事はまさにそれである。

かつての薄暗い博物館のイメージから生涯学習支援への施設に移行する必要がある。科学博物館が開設から10年経ち新しい展示を始めたが、お金をかけているが教えてあげますという姿勢がみえみえで、来た人が自由に学ぶことを支援する形になっていない。ひとはくで考えているのは、みんなで学ぶ喜びを見出すことにどうやって対応するかである。

学びの波紋をつなげる連携

ひとはくは県立だから、県民にどう対応するかを考えると、兵庫県民は560万人、ひとはくの職員定員は56人。今は定員が欠けて53人。お手元に配っている資料1を見ていただきたい。あるものに驚きを感じ、その驚きが知的な活動につながると学びになる。その驚きは動きの中から出てくるもので、そういう要素をかね揃えておく必要がある。ところが56人で560万人に対応するのは難しいので、驚きを県民全体に伝えるには核から徐々に広げて環を作る必要がある。環を作る一つの行動がキャラバンであり、これまでに各地でしてきたセミナーである。環の広がりには博物館が手下を作るというのではなく、ある学びのセンターがあってそこから波紋が広がるという形で、学びを助ける環を最終的には560万人県民に広げたい。博物館を中心にした環があれば学校を中心にした環もあり、いろんな環があると思うが、人と自然の共生という活動に関してはひとはくが核になってという意味である。56人が560万人に直接つながれないから環を伝える波紋が必要で、連携というのはまさにそういう拠点になる。その連携の核になる人が、ひとはくと一緒に育っていかなければならない。これは博物館の手助けをするという発想ではない。560万人の県民が学びを志向する時に、地域で直接的に手助けができる人をどう作りあげていくかという発想になる。

資料2は、ひとはく展示のリニューアルについて。物を並べておくだけではなく、来館者にどのように驚きを伝達するか、その驚きを学ぶことにどう結びつけるかが博物館の今後の核になる。来館者が展示を通じて、実体験につながり自主的な学びに展開していく方法を考えている。

資料3は、それらを生涯学習院というものにまとめたらどうなるかを定義したもの。生涯学習を支えるためには、これから学び始めようとしている人を手助けできる人を育てることが非常に重要となり、連携もここに位置づけされる大切なことである。

さらに後継者養成を含めて、専門的な知識とシンクタンク機能を持つような人を育てる大学院も生涯学習には絶対必要ではないか。このようなシステムを持つことによって、ひとはくはこれまでの日本的な発想の博物館を抜け、最先端の活動をやっていこうとしている。

最終的には環境リテラシーの全県的な向上につながる。環境保全是国民が自らやるもので、全県的に向上させないといけない。そのためには地域学習拠点を創出し、人々に自然と接触する場を与えていく必要がある。これが連携事業に協力していこうという発想につながっていく。今日ここに参画してくださった皆さんが、博物館の手助けをするのではなく、560万県民が学びに参画していく手助けをする資質の向上を皆さんご自身がやっていただき、それを博物館がどう支援できるかということである。

黒田：学芸員とインタープリターの違いは？

高野：研究員は自分の専門に特化している。ひとはく来館者が求めるのは浅く広い答えて、専門的に説明しても分からないことがある。来館者と研究者の間を通訳する人が必要ではないかと考え、そういう人を育てられたらいいと思っている。

黒田：研究者は本来インタープリターの役割を果たさなければならない。難しく話すのが研究者ではないと思うので、博物館の基本的な捕らえ方を聞きたい。我々は、もっと県民の前に顔を

出そうというスタンスだ。

岩槻：おっしゃる通り研究者全員が良いインタープリターであるべきで、良い研究者であるほど良いインタープリターになる。現在、学校を退職されたミュージアムティーチャーの方たちが、インタープリターとして優れた効果を出している。まだ漠然と議論を進めている段階である。

4. はじめに（藤本）

皆さんキャラバンでお世話になった方たちなので、ひとはくのことを思い出していただくのと、去年議論を重ねた結果を振り帰る意味を含め説明する。今日は深夜まで議論が続くので、助走のつもりで聞いてほしい。

西播磨で3年間キャラバンをおこない、2002年は佐用町立文化情報センターで「清流千種川のこれまでとこれから」、2003年は上郡町中央公民館で「川ガキの復活！！ 大好き！ 千種川」、今年は一宮町の歴史資料館と伊和高等学校の2会場で「iのまち ふれて、感じて、さぐる」という内容だった。特徴や共通点を話しながら、思い出してもらえたらと思う。

まずすばらしかったのは、地元の展示が光っていたこと。地域資源である千種川や掛保川という地域自然や歴史をとて愛していらっしゃる。それを身近な人に見せたい、外の人にも見せたいという思いが強い。だからこそすでに活動が盛んにおこなわれている。山陽町の場合は14団体で実行委員会を作り、それぞれの団体が成果を出していただいた。田がめっ子くらぶ、千種川圏域清流づくり委員会、千種川生物研究会、小学校、西播磨天文台などから多彩な展示物を出していただいた。

上郡町では、上郡中学校科学部から日頃の成果を出していただいたり、上郡高校から千種川の魚を展示していただいた。地元グループからも千種川全域の川の地図が出されり、相坂さんが虫の民俗資料を展示してくださった。

今年の一宮町では、もっとも画期的だったのは2会場を1週間ずつ移動したこと。歴史資料館と伊和高等学校で展示させていただいた。2会場を移動するのは大変だったが、地元から協力を得られた。8つの水槽に掛保川の魚を展示したり、町役場からも展示があった。

2つめの特徴は、地域の実行委員会が非常に積極的なこと。回数も多く自分達がやるんだという意識が高く、佐用町の場合は先のようにたくさんの団体に入ってもらったし、上郡では上郡高校の生徒が先生と一緒に参画してくれた。一宮町の場合は実行委員会を9回も開催し、展示会場にも出向きひとはくにもいらした。開催前にひとはくに来られたのはここが初めて。

去年は、11月に「新しい博物館機能を考えるワークショップ」を、「新しいひとはくづくり検討会」を3回開いた。ワークショップには横山先生、岸本さん、東山先生が、検討会には岸本さんに参加いただいた。非常に内容が濃く、その検討結果を振り返ってみる。資料2-2、資料2-2 補足を説明。

また、資料6は事前アンケートの内容をまとめたものなので、参照いただきたい。

5. 「地域とつくる展示」（高野）

ひとはくでは、これからの博物館をどうするかという議論が進んでいるが、もっとも基本的な展示についての考え方をお話しして、皆さんからご意見をいただきたい。

これは密かにフラワータウン駅前ひとはく化計画と呼んでいるもので、本館だけでなく新館を建てて拡張しようという方向で話が進んでいる。博物館に来る方の興味レベルはさまざまで、団体で来て1時間2時間で帰る方もいれば、もっと知りたいという意欲を持って来るお客さんもおられる。いろんなニーズに合わせて展示を考えた時に、少しだけ自然に興味がある人がもっと関心を高める展示をしていきたい。今年も三田の近くから化石が出たが、そういうものの模型や、美しい昆虫の標本などまずじっくりして関心を持ってもらい、深みにはまっていくようなゾーニングを考えている。

ある一定以上の関心がある方にどう仕掛けるかという視点で見直した時に、現在は教えてあげ

る展示になっている。動かさない、変わらない、見学する内容になっているが、将来的には自ら学べる展示にしたい。変わらない展示を常に更新される展示、活用できる展示にしたいという目的があり、テーマである「地域とつくる展示」は、常に更新される展示の仕掛けとして考えている。

新しい博物館の構成では、3階にユニット展示を置き、県内の各地から展示を持ってきてほしいと検討中。一定期間展示した後、地元を持って帰るか、他の県内、県外へ持っていくなど、ひとはくと地域の双方向の動きにしていきたい。キャラバンも今は一方向だが、双方向キャラバンにしたいと考えている。

テストケースとして位置づけられるのは、今年7月24日から8月24日までおこなった「丹波国領博」で、丹波春日町国領地区の皆さんが、村の特産物、よろいなどを持って来て展示していただいた。ひとはく研究員の仕掛けで始まり、搬入・搬出・展示・レイアウト、よろいを着てみるイベントは、すべて国領の方が実施した。展示後は、地元の公民館に持って帰り、小学校の総合学習に使ったり、地元のイベントに持って行ったりと活用されている。他の地区から、ウチもやりたいという声が挙がっていると聞いている。このケースが地域とつくる展示に近い形だと思う。

地域と作る展示を実現させるにはいろいろな条件がある。まずはやりたい人、地域の自然に詳しい人、ネタを持っている人、展示技術を持っている人、コーディネートする人、拠点、物、お金が必要。例えば西播磨でやっていただけるとして、どんな展示ができそうか、どういう物、条件が必要かなどをお聞きしたい。また地域の思いをどうやって反映させたらいいかなどをお聞きできればありがたい。

生物と光の関係

黒田：天文台が出来たせいで、景観条例の中に光害関係の条例ができた。光と生物の共存、光と地域の関係、光の良い面、悪い面を展示できたら面白いと思う。マイナス面では稲の生育に影響があるし、我々が知らない生物と光の関係、どんな光の色に生物は寄ってくるか、人間を含めた生物の光の関係を展示してはどうか。

田中：光害といえば、橋の欄干の水銀灯が原因で川に昆虫がいなくなった、河川改修ではなくライトが原因だと言っている人がいた。

黒田：まちづくりの分野では光は重要だと思う。総合的に力を発揮できるのではないかな。

岩槻：生物学の中にも光生物学がある。

黒田：天文台の周りの街頭を規制する県の条例が、1月1日の施行でできた。

原体験

横山：展示をするために、西播磨の一言でいうねらいは何か。行って、やってみて、面白いことが根本、楽しさがなかったら続かない。キャラバンもしんどいこともあったが、終わった後に面白いから良かった。ベースになる言葉は「原体験」ではないか。

大阪に住んでいた頃バイクで返ってくる時に、千種川を越えるとまず暗くなり、次に空気が冷たくなり、川の音が聞こえて来ると、自分が生まれ育った所に帰ってきた感覚がする。ふるさとの暗闇、空気、においが自分の中であって、そこで楽しいことがしたいし、子どもたちにも伝えたい。人間として自然環境の原体験を体感する。どういう風に体感、また展示するか。展示をするには、物を集めたりデータを集めたりするので、最終的には環境リテラシーにつながっていくと思う。

先ほど話がでた水生昆虫の標本は、自分が採りに行って作ったから思いが残る。それがどこでもできるのが西播磨だ、海、山、川が良い状態で残っているので。自然を求めて外から人が来れば一つの産業になるし、地域の人が食べていければいい。

昔一緒に調査をやった時川にはまった生徒が、新幹線のコマーシャルの風景を見て「先生、

これ俺がはまったとこやなあ！」と今でも覚えている、もう25、6歳になる人だが。それが原体験になって環境への意識ができ、勉強大嫌いな子が地域の環境に思いができる。そういうことをクローズアップして展示していったらどうか。

フィールド博物館

田中：原体験を博物館の中で感じるのは無理なので、外に出かけるきっかけを作る必要がある。

横山：地域の中に体験スポットを作り体験ができると思う。ここでこういう体験ができるよという情報と、ちょっとした整備をするだけで、フィールドそのものが博物館になる。

田中：フィールドミュージアムを流域の中のスポットにつくる。

横山：どの季節にここに立ったら、夕日のすすき野がきれいに見えるポイントだとか、そこで解説が読める、別に人がついていなくても良い。逆に人がついて、ツアーで一日スポットを回る方法もある。

田中：そのミニチュア版が博物館にもあるし、他の地域のキャラバンにも回っていくと。

藤本：事前アンケートの中には、グループの取り組みをラインアップしたらどうかという意見があり、それと一緒に推薦するスポットを挙げてもらったらいいかもしれない。ツアーの時にグループを回ったり、解説してもらったりしても良い。

横山：(スポットを)グループに管理してもらっても良い。

黒田：天文台では年に3回サイエンスツアーを開き、16回続いている。天文とは関係ない内容で「兵庫は大きな博物館」という名前で行っていて、一泊二日で30人くらい全国から参加される。とにかく現場主義でたたら跡を見に行ったり、石垣の違いを見たり非常に面白い。コンクリートを使わない博物館というイメージで、バス一台と拠点があればできるので、自然史系でもできると思う。各地域を見に行き、博物館研究員からプロの説明を受ける。それがこれから求められる活動だろう。

藤本：田原先生は実際に、昔の地図と今の地図を照合しながら読み取っていくツアーをやっている。確かに博物館の人と一緒に自然を歩くと面白い。違うものを見ていて、それぞれの分野によってうんちくが違う。

黒田：お世話する人がいるのといないのとでは全然違う。バスの手配、宿の手配、コストなど手間が大変だ。天文台ではこれまで参加した150人から200人の人にダイレクトメールを出し、ホームページなどでも募集している。

岸本：博物館内に限らず、全県下の展示を模索しているのか。

黒田：両方いる。

岸本：核としては、ひとはくを拠点とした今ある部分を考えてくれということか。

高野：それも考えてほしいが博物館内だけに限定しない。

ひとはくまるごとデパート化

岸本：国領の展示を見て面白かった。一宮では地域実行委員会にパワーがあり、それぞれのスペシャリストが集まっていると思った。西播磨には自然史系のスペシャリストがいる、ひとはく研究員の地元版みたいだと思う。

先日、テレビ番組「その時歴史は動いた」で三越デパートを扱っていたが、ひとはくそのものをデパートのようなアミューズメントパークにしたらお客さんは勝手に集まってくる。そこでビジネス効果があるようにしたい。博物館は知的好奇心を満たすところだが、華やかなものに触れたり、美しいものを感じたりする場であっても良い。国領の展示では、地域のおまんじゅうを置いてあり欲しいと思った。デパートの物産展では試食して買えるように、博物館もそうならないか。自然科学以外の別ジャンルのプロも地域にいるはずなので、そのような方が実行委員会に入っていたことが一宮キャラバンの力の源かと思った。

中瀬：豊岡では実際にやっている。

岸本：地元にお金を降ろすことも考えてほしい。

藤本：ワンフロアーに道の駅を並べるとか。道の駅を自然科学で読み解く。

岸本：おもてなしも受けたかった、さびしいなと思った。暗いしね。

世良：ひとはくキャラバンをする時に、一宮町では「ひとはくって何じゃい」というのがほとんどの方だった。560万人の県民がひとはくに足を運んでもらいたいと思った時に、どの層にマーケティングしていきたいのかが見えてこない。誰でもいいからたくさん来てもらいたいのか、560万人の10万人でいいから、もっともっと掘り下げて地域に帰って地域で活動してくれる人を求めているのか、それによって展開の仕方が変わってくる。先に藤本さんが言われた地域のグループを使っていこうというのは、私も思っていた。地域に10万人の研究者がいて、さらに地域にそれぞれ10人のサポーターがいる、そういう形が理想ではないか。

今日の新聞に、三田インターのそばに関西一のショッピングセンター建つと載っていたが、ひとはくから10分もかからない所にそんなショッピングセンターができれば、新たな展開になるのではないか。

藤本：連携事業で議論しているのは、地域で深く関わっている方と連携していきたい。でもその方々と出会おうと思うと、大きく広げることが必要。深くつきあう関係もいいがどんどん濃くなるので、時々ふっと広げる。時々どちらもやっているの、何がしたいか分からないのかもしれない。キャラバンやフェスティバルは、多くの人に知ってほしい意味でしている。今日の議論は、地域で活動し輪を広げる人を育てたい、ということ。

田中：10年前の開設時には、常設展示のターゲットは高校生以上だったが、面白くないと非常に評判が悪かった。現在主に展示を見ている人は小学生、中学生だが、ほとんど理解不能だと思う。

中瀬：電通のある方がひとはくの展示を見て、偉い学者が集まって思いっきり自分のものを書いている、世界的にもめずらしいと誉めていた。

田中：これまでは研究者と展示業者の間に、専門を噛み砕く編集者がいなかった。それが、高野さんの話のインタープリターの必要性につながる。飛びぬけて良い学者は専門にも通じ、一般の人にも通じるように話せるが、中途半端な学者は良くない。

岩槻：日本には良くできたサイエンスジャーナリストがいない、それは職業としてなりたないから。スポーツジャーナリスト、芸能ジャーナリストはいてもサイエンスジャーナリストはいない。日本の研究者自身が、噛み砕いて易しく話すのは堕落だと思ってきた節があり、例えば研究者がテレビに出ると、売名行為だとしばしば言われる。そういうところに問題があり、研究サイドが根本的に変えなければならない。サイエンスジャーナリズムが成り立たない現時点で研究者がどうするかというのは、我々博物館の問題でもある。

横山：教育者も同じだ。進学学校で教えていたら毎年同じ繰り返しでいいが、ウチの高校では、方程式やメンデルの法則と言ってもわからないので、どうやって噛み砕いて興味持たせるかを考える。小学校や中学校ならさらに工夫しないと。原理原則を分かっている人が一人いて、その周囲に原理は分かっても子ども達をサポートできる人がいればいい。子ども達がなると言うレベルになった時に、専門家とのつながりを持っていければいい。裾野を広げる意味で、インタープリターとその人を現場で支えるサポーターが必要だ。

竹野センターが10年前に指導員養成を3年間おこなったが、いろんな職種の人が集まっているので、いろんな知識も集まる。生物については高校教員から伝わるし、一般の人は一緒にいることで段々と知識が増えていき、皆さんが独立して指導できるレベルになっているとても良い例がある。場の提供、人の養成、実践をうまく組み合わせる。休暇村とタイアップして生徒達を送っている、トレーニングを積むことになるので指導員が育った。このような良い例を参考にしたらどうか。

大本：ワークショップでは講師と記録の人がいて、記録の人に参加者の疑問を講師に伝えるピア

エデュケーションを大切にしている。高校生対象のセミナーでは、大学生のような若い講師とベテランの記録の人とを合わせていた。若い子は高校生が言えないことを促進してくれ、それで学びが深くなる。ピアエデュケーションのような存在がインタープリターとは違って必要だと思う。

東山：西播磨で展示できるとしたら豊かな自然だと思う。地域の展示だからすごいものでなくてもいい。例えば中学校や小学校で展示を作り指導者がサポートしてあげれば、自然にふれるチャンスになるのではないかな。稚拙なものであっても他とは違う輝きがある。特別めずらしいものを出すのではなく、子ども達の手で視点で発信できる場になれば面白いと思う。

藤本：本当に地元が満足する展示をしようと思ったら、地元の意向を配慮する仲立ちの人がいないとうまくいかない。

岩槻：植物園はこれまでは木や花をきれいに見せるところだったが、都会の人は自然に触れる機会が少ないので、花をちぎったりつぶしたりできるコーナーも必要だ。博物館でも標本に触れるだけではなく、例えばたんぽぽの花を山ほど採ってきて、それをつぶしてみたら花ってこんなに面白かったのかと思ってもらえる。触れるというのはそういうことだ。展示に花の構造の説明があれば分かるが、そういう理解の仕方と自分でつぶしてみたら構造はどうなっているのかとを体験するのは違う。西播磨の子どもの視点で自然と接触し、神戸や三田の子ども達がどう思うかという場を持てたら良い。

岸本：仕事で「佐用まるごと美術館プロジェクト」を担当している。佐用の自然に1ヶ月に1回出かけていき、ひとはくからも講師が来ていただいている。西播磨のミニキャラバンと私の中では思っていて、12月には展示会を開く。自然に触れたり、友達と出会ったりする全部の行為がアートなんだと言いたかった。子ども達がやって楽しかったというのも大事だが、展示をすることで自分達がしたことを振り返り、佐用にはこんな所があるということを他の人に知ってもらうことが大事。これがうまくいけば、地域で作る展示の佐用版になると思う。

佐用高校の生徒にもボランティアスタッフをお願いして中継ぎをやってもらっている。高校生の方でも良い体験になっている。12月5日から1週間展示をやるので、ぜひお越しください。

横山：中には試験中でも行ってる生徒がいる。岸本さんがコーディネートした子どもがいる場で、一緒に活動するのが楽しくて行っている。高校生と幼稚園児は意外とマッチする。大人でも中学生とおじさん、おばさん達が合う。必ず大人が入らなければならないということではなく、間に入る人を置くことも重要だ。

大本：確かにコーディネート力は大事だ。僕はもともと社会の高校教師だったが、テーマは自由でグループ発表をさせた時に、生徒はいろんなことをやってくれた。一番面白かったのは、当時加古川でテレホンクラブの条例を作る時だったので、生徒達は議員に話を聞き議会の傍聴して発表した。子どもはいろんなことを考えるので、共に学ぶスタンスが大事である。

横山：上郡高校には農業クラブがあり課題研究があるので、（彼らがボランティアすることは）持ちつ持たれつの関係になっている。この間は上郡で子ども環境学習発表があったが、その後の活かし方がない。博物館に持って行ってあげたらもっと展開できる、学校がOKだったらそのまま持っていけると思う。

藤本：展示は地域にまかせんかい、という感じですね。うまいこと引き出せるか？ みたいな。

横山：新たにと言ったらキツイ。

岸本：この期間は任せるからやって、という形が良い。

横山：忙しい時期、例えば秋の運動会を外すなどタイミングもある。

藤本：農業科や畜産科の子達は、よく気が付くしよく働く。おじちゃんおばちゃんとの付き合い方を知ってる。

横山：なかなかそういうところを認めてもらえる場がない。

自然学校とひとはくの連携

黒田：兵庫県の場合は自然学校を大々的にやっているの、充実を図るためにひとはくが指導的役割を果たすことが大事ではないか。

大本：自然学校の受け入れは多い。淡路の一宮町と西播磨の一宮町が連携して、山の自然学校、海の自然学校を連合でしている。淡路、ひとはく、自然学校はぜひとも連携してほしい。自然学校をコーディネートしていくことは有効だと思う。

黒田：1週間ありメニューが多すぎて何をやりたいのか分からないので、何でもいいから子ども達にやらせる方が将来的に効果がある。

大本：学校の姿勢もある。休憩時間を作ったら子どもが何をするか分からないと、空き時間を作らないコマ埋め。雨もネック、雨を楽しむプログラムもあるはず。自然体験がUSJのアトラクションのようになっている。

世良：うちの小学校も南淡路に行った。丸投げできるということで多数が行っている。ひとはくと自然学校の連携は双方にメリットがあるし、学校も子どもも喜ぶのでぜひ積極的に展開してほしい。

波多野：以前は青少年自然の家で働いていた。西宮の委託料で町職員が働いており、ほとんどが自然学校の受け入れ先だった。自然施設に指導主事がいないのと、学校側から何かをしてみようという意識が感じられない。学校の担当の先生や施設の指導を担当する人達との連携、ひとはくとのコミュニケーションも必要だと思う。

横山：指導主事でないといとはく行かしてもらえない、とかね。

中瀬：そういう仕組みを提案してはどうか。好きな時間帯に行ける仕組みを県で作ったら良い。

大本：府県によって事情が違う。淡路青年自然の家は指導主事は兵庫県だけ。大阪と徳島は高校教諭で、戻る場合もある。

横山：京都、大阪には理科センターがあり、理科の教員が研究をする。兵庫県にはなく市単位ではある。

6. ひとはく・地域研究員（田中）

地域研究員にはいろいろな段階があると思うが、例えば自然に関する調査をしたい時に、博物館には専門家がいるので手伝うことができる。環境学習にはやはり自分の視点、核を持っておくべきで、核となるのは自分が持っているオリジナルなデータである。何かしたいと思っている人がどこで躓いているかということ、見分けること、どうやって調べるか、どうやってまとめるか、まとめたものをどうやって伝えるか。

山東町のキャラバンでは、植物を調べよう、川の生き物を探そう、夜の昆虫観察会、星を見る夕べ、大地の生い立ちを探るなどいろんな取り組みをおこなった。これらが今後も続いていくとすれば、山東町のグループがオリジナルな視点やモノを持たないと、他のオリジナルの評価もできないし理解もできない。

そこで、地元の水辺の生き物を探ることをした。「こんな生き物みたことありませんか？」ということで、素人が見ても判別できるカワラナデシコ、ツリガネニンジン、モリアオガエル、ゲンジボタル、カワウ、ヌートリア、アライグマ、イワツバメの調査をおこない、分布図を作った。キャラバンや学校など7ヶ所に置き、一般の人から分布情報を集めた。

次にキャラバン実行委員会の有志に自分たちでオリジナルな調査をしませんかと呼びかけたが、初めは何をやりたいかが決まらなかった。話し合ううちにカエルがしたいという声が出てきた。僕は魚が専門だが、やってみようということでカエルの調査を始めた。

「第1回カエルを探る」には10人が集まり、まず何がいるかを調査した。ツチガエルとヌマカエルの分布状況を調べたが、あまり面白いものがなかった。また、ほとんどの田んぼに鹿の害を避けるためにフェンスが張ってあってカエルを採りにいけない。メッシュがかかっている田んぼと溝を調査するのはあまり楽しくないなあ、というのが相談の結果で、鳴き声で分布調

査をすることにした。

「第2回カエルを探る」には8人の参加があり、4隊に分かれて川の近くに3分間座って耳をすませ、カジカガエルの鳴き声が何回聞こえたかを数えた。分布図を作ってみると密度の濃い部分があり、そこはまさに来年春から予布土ダム着工する予定地だった。カジカガエルの繁殖期は夏前、調査は夏でピークを過ぎていたので、ダムができる前に再度調査をやろうと心積もりしていたが、先日行ってみたら台風23号の土石流で発見できなかった。

キャラバンで活動していただいた方にも何をしたいか問いかけた。まず、高野さんに分類学の基礎講座をしてもらい、次に生態学についても講座を持った。その後ゼミ形式で進めている。今年度の終わりまでに来年何をするかを決めて実行し、アウトプットしていただく。

生涯学習は興味を抱いた驚きが原体験として大事だが、自分だけのオリジナルを持つためには信頼性のあるデータを取り、まとめ、考察することがいる。それを繰り返していくことで螺旋状に上に上に行くと思うが、情報交換をおこないスキルアップしていく。これが続くと段々尻つぼみになるので、モチベーションを高める仕掛けが必要になってくる。連携ホームページへの掲載、企画展での発表、助成金の獲得、新雑誌の発行など、博物館がどんなことができるのか、皆さんがどんなことを望まれるかをお聞きしたい。

藤本：事前アンケートでは「地域の詳しい人との連携が重要」「地域で専門的な質問に答えられる人は難しいので、地域研究員がひととはくと関係を持ち問い合わせる方法もあるだろう、仲立ちをする人」「地域のグループを巻き込んで有効に効率的にできないか」「小学校、公民館、PTAとひととはくが連携してプログラムを考える」「希少生物を調べるチームを地域で編成しひととはくと連携し深めていく」「まるごと美術館プロジェクト」「拠点とする施設がなくてもネットワークする事務局」、それから「地域研究員は、どういう位置づけで意味を持つのか」という質問もいただいている。

波多野：山東町でおこなったキャラバンとは別に、地域研究員養成セミナーということで紹介があり、地域にどういうものがあるのか分かる必要があるのではないかと、ということがあった。山東町にはグループがなく、星を観る会があるくらいで自然環境に関する会はなくバラバラに活動している状況だった。ひととはくキャラバンができる段階で、実行委員会に集まり一つになっていったことが大きな収穫だった。その母体を中心にステップアップセミナーを開いて参加していただくという形で中央公民館の講座とタイアップしておこなっている。問題点は、セミナー実施の時に町内にチラシをまいてもなかなか来てもらえない。しかし、人数が少なくても積極的に関わっていく気持ちのある人が集まっているので、良かったと思っている。

山東町にどういうものがあるのか、というデータが全くない。我々は今年から出発してひととはくの先生に手助けしていただいている状況。ふるさと教育を掲げているわりには基本的な地域調査データがないので、これから始めていきたい。合併で山東地区になってしまうが、交流を続けて膨らんでいき形になっていくと思う。

町内にオオサンショウウオがたまに出るのだが、見つけると川の一番上流に連れていってしまう。行政の職員も分かっていない、地域の人も一番上流の滝壺におるもんだと言う。サンショウウオは山東町にいるのか、いやいな、たまたま迷い込んで来ているだとか、そういうレベルだ。

アセスメントがあったことも教育委員会、産業課、建設課も知らない。ひととはくの先生にはパイプ役になってもらいたい。我々にとってとても有意義だと思っている。

岸本：佐用も同じ状況で、詳しい人はごく少数。ただ、自然が豊かなことを誇りに思っている意識は皆同じで、豊かな環境に住んでいるという認識はあると思う。

横山：この辺りは、30年前から千種川流域の水生昆虫調査を同じ日に一斉におこない冊子にして、小学生や中学生、一般人に配っている。ただし、調査には参加しても結果を理解できない人はたくさんいる。地元の人には千種川流域が清流だということは言葉では知っているが、積極的に育てよう守ろうという動きは今まではなく、各町で思っている人達をつなごうとしたのが、5

年前の千種川流域清流づくり委員会。キャラバン、川のサミットなどしてきたが、意識は大きく変わっていない。

先月この前でオオサンショウウオのイベントを開いた。地元の人4、5名が研究グループを作り毎月調査を実施、兵庫県自然保護協会、水族館から学術的な支援をいただいている。流域2市7町からの一般参加は5名、委員は県民局なども含めて10名。状況は山東町と同じ、ただ圏域という言葉でつないだおかげで、岸本さんや他の方とつながりができたのは大きな財産になっている。流域で一斉に最高水温を計ろうというイベントを3年目100ヶ所、80人を手配しおこなっている。

田中：30年間ライオンズクラブがしている調査があるので、水生昆虫と水温を使って千種川の現状認識、それに昔の人の原風景が重なると50年後の千種川のあり方が見えてくるかもしれない。

横山：3年前は渇水で異常に水温が高かった。中上流でも30度近くあったし、昨年と今年は下流まで24度、来年もすることを委員会で確認した。反省点は、調査に参加した人に結果を還元することができていない。調査で何が分かったのか見えないと効果がない。まとめは予算、技術面で力を借りないとできないので助かっている。

子ども学芸員

岸本：地域研究員の対象は社会人なのか。子ども地域研究員というお墨付きがあって、ひとはくとのつながりがあるといい。子どもも視野に入れたら広がりができるのではないかな。子どもが動くと大人も来る、子どもをだしにきっかけを作れば。子ども地域研究員が将来ひとはくで働いたり、地域から有名人が輩出されたらなお良い。

黒田：茨城県立自然科学館には子ども学芸員制度があり、1年間土日を活動日にしている。子ども研究員が全て三田に行けるとは限らないので、地域に出かけていくことが大事になると思う。ひとはくの研究員がひと月に1回でもいいから子ども達にある一定の学習を一緒にして、問題意識を共有し、子ども達も地域で活動するようなパターンは、我々もやりたいと思っているが、ひとはくでもやっていただきたい。

横山：町の真中에서도足がないから来にくい。親が送ってくれない限りは、地元の小学校、中学校でないと来れない。

黒田：茨城県立自然科学館はすごく不便な所にあるが、それでも年間50万人以上の来館者があり子ども学芸員制度も活きているという発表があった。交通の便の悪さではなく仕掛けで、面白そうだと思うものがある。

岩槻：ひとはくが子どもとどう接触できるかということがあるが、学校の先生へのアプローチもやらなければならない。先生を通じて輪を広げ、全体に波及効果を広げていく。

黒田：教師は忙しいとよく聞くので、先生方をお願いした時に本当に動けるのだろうか。教育委員会を含めたシステムを作らないと、今のままでは学校の先生は動けないのではないかな。

岩槻：今年の夏に学校の先生の講座を持った時、非常に積極的に参加しておられた。

横山：意識の高い教員は、全県の数パーセントで一桁になるかどうか。そういう先生がいる学校では取り組めるが、その先生がいなくなったら難しい。裾野を広げるには仕掛けを作り、機会を増やさないと先生から子どもや父兄に伝わらない。

世良：行政でも同じで、担当者の熱意に左右される。だからこそしっかりした地域研究員が地域にいて、その人を中心にして教育者や行政がフォローしていくスタイルが理想ではないかな。

大本：学校の先生の意識を変えるのはしんどい。先生がいい体験をしないと広がらない。先生のリフレッシュメント、1週間くらい自然の中で過ごす先生のための自然学校があっても良い。

横山：1週間現場で働く研修に今年行った。選択肢がありデパート、擁護施設など。僕は牧場でおこなった。

東山：上郡では、理科に興味がある小学校の先生はほとんどいない。小学校では先生の影響はと

ても大きい。キャラバンではできるだけ小学校の先生に来てほしい。小学校の先生は忙しくない、中学校はクラブ、進路指導など忙しい。忙しいのは言い訳であって、もう一歩踏み出していないだけ。先生達に分かってもらう機会を作れば、子ども達に伝わる。

藤本：地域の人とつながってから学校の先生に出会うと、良い先生に出会える。キャラバンでも地域の推薦で必ず良い先生に入っている。ひとはくもやはり良い先生と一緒にやりたい。

横山：リクエストを聞いて日時を決めたり、地元の都合に合わせるもの必要だ。

波多野：キャラバンでの反省点は、一般の先生の参加がゼロだったこと。先生にスキルを持ち帰ってもらい、子どもに影響を与えてほしいという思いがあったのに残念だった。実行委員会には教育委員会関係者がいたのに、学校との連携が取れていなかった。

岸本：佐用ではキャラバンで学校の参加を呼びかけたのは、前の教育長の声かけが大きかったから。参加した人に余韻はまだ残っていて、何かの時にひとはくの問い合わせを受ける。これからもひとはくの名前を沢山ばらまいていくことで成果が出るのではないかと、学校へのアピールは無駄も多いが続けた方が良い。

大本：先生に来てもらう一つの手段は長期研修中の自主研修がある。キャラバンにも理科だけでなく教科を超えて先生がスタッフに入れるようになれば良い。また、大学生のボランティアマネジメントセミナーをした時に、終了後にメーリングリストを作り淡路に限らずいろいろなセミナーの情報を1ヶ月か2ヶ月に出したら、返事が返ってきてニーズが分かることがあった。直接広報に行った時に、なぜ参加してもらえないのかを聞くことによって次に活かしていくことも必要だ。

藤本：地域研究員の議論は、ひとはくでもいろんなイメージがある。専門性が高く地域にいる人を育てたい、総合性がある人、人をオルグする力を持っている人、ひとはくと研究員と一緒に飲んだら地域研究員とかいう意見もある。地域研究員はひとはくのために作るのではなく、地元のためにならないと。きっといろんな人がいていいのだろう。



7. エコ・ネット・ミュージアム（藤本）

博物館では、人の生活を含めた地域の自然環境を未来に継承していく仕組みを各所に作り、その拠点がつながるエコ・ネット・ミュージアムを作ろうと考えている。いきなり兵庫エコ・ネット・ミュージアムと言ってもすぐにできないので、地域とのこまめな付き合いをつなげていくものだと思う。その最初がキャラバンに見えている。地域を知る、盛り上げるきっかけとしてキャラバンを使っていたのは非常に有効だった。一宮町では、ジャスコの中にキャラバンの垂れ幕がはられたのは嬉しかった。手作りのシールを公用車に貼り走ってもらった。

ひとはくとのつき合いを深めていく段階では、協働の調査・研究もやってきた。川の温度調査では、調査方法を教えたり、結果の分析、GISで情報を一元管理している。地域の自然環境把握、分析についてひとはくと連携できる。そのあとで、連携でもっとしなければならないのは結果を広く伝えることである。

もう一つは協働で事業をすること。竹野町ではエコツアーをおこない、地域からは農家での宿泊など場を提供してもらい、ひとはくは参加者に地域をまるごと体験してもらうノウハウを提供した。地域で持っている課題を博物館も一緒に認識し、その解決のために一緒にやろう、ということ。この事業の担当者は良い関係を地元と持ち続け、毎年竹野町でおこなっている。

協働事業の次の段階も応援していく必要がある。地域のコアとなるパートナーと関係を持ち、サポートし密に連携していくこと、それがエコ・ネット・ミュージアムへの道になる。地域の課題を地域で解決することを博物館が支援していく。専門的な技術や地域での意思決定に博物館を使ってもらおう。これに対して地域研究員、博物館の生涯学習院、シンクタンク活動などが関わってくる。シンクタンクの窓口を地域でどうしたらいいか。地域の類似施設との連携。地域の施設と博物館が連携して、博物館に来なくてもそこで何かできるのではないか。どんなことをすると関係性を深め、博物館と地域が同時に成長できるか。その辺りをお話いただきたいと思う。

横山：環境局がやっているナチュラルウォッチャー制度は、最初はすごいものができたと思ったが、バッチをもらっただけで時々冊子を送ってくる程度でもの足りない。スタートは良かったが発展していないので、そうならないようにしたい。後の経過を追っていくことが一番大事だ。

今回の洪水で地元では初めて洪水が起こるものだと実感し、堤防をはろう、ダムつくれという意見が出ている。地域研究員が地域に多ければ、住民側の意見と合わせながら環境と共生するシステムを考えることを発信できると思う。環境という分野だけではなく、地域での生活、文化、歴史とのつながりを考えたら、地域研究員にはいろんな色の人が必要になる。

岩槻：人と自然の共生について活動する核にひとはくがなるのであって、その他の分野の核がいくつあっても、それらを地域研究員みたいなもので広げていき、県全体を高めていく構造でないといけない。兵庫県が良くなる一つの機能をひとはくが果たしましょう、ということ。

横山：県立大学の環境人間学部では、自然環境関連のカリキュラムが少ない。西播磨では京阪神と違い、大学生の参加がほとんどない。自然学校には多くの学生がボランティアとして入っているが、西播磨には県立大学があるが、そういう活動する学生がほとんどいない。やはり大学生以上の人材もほしいと思う。

大本：単位認定ができれば一番簡単に済む。地域研究員の強みは、皆さんいろんな仕事をしているのでインフォーマルな人的ネットワークだと思う。それぞれの人的ネットワークがつながれば、市民主導型のまちづくりに展開するのではとエコ・ネット・ミュージアムにとっても期待する。

波多野：地域研究員の有用性を考えてみた。学校教育、社会教育を含めて総合学習との連携が言われているが、もう一つ進んでいないので、講師としての入り方があるかもしれない。公民館の教室に来てもらったり、地域の中で講師活動は結構できると思うので、ひとはくキャラバンなど大きな事業の場合は、ひとはくの先生に出てもらって、地域に対してピッタリくるのが地

域研究員だったら良いと思う。そういう意味では有用性が高い。

問題点としては、肩書きや組織化されて教育委員会や学校に認識されることが大事。活動しようと思っても学校や教育委員会に知ってもらえないと何も依頼が来ない。組織に対してどうやって売り込んでいくかが次の問題になる。

藤本：大学生に例えると、卒業しても就職先がない、ということか。逆もある。県のレベルで変に資格を与えると、継続教育を受けていないうえに威張る人がいる。出口論、あとあとのことをきちんと考えておかないと困る。

有効期限、資格など

田中：地域研究員の資格認定レベル、有効期限、活動する場の確保など、博物館でもどうしたらいいか悩んでいる。大学院なら博士号があるわけで、どの辺をクリアするのが課題だ。キャラバン、地域イベント、観察会、調査などを対象にするので、博士論文より多様な切り口になる。岩槻先生から「あなたを地域研究員として認定します、ただし期限は3年」とか。地域ミュージアムでのインストラクターやエコツーリズムなど活躍の場も確保する。レベルの縛り、免許書の基準、効力、期限については難しい。

黒田：年齢はともかく、1年に1回くらいひとはくから地域に来て研修をした方が良い。研修をして簡単なレポートを書いていただいて、チェック機能を置いた方が良い。例えば2年に1回は受講すること、というような縛りは必要だろう。

田中：研修と、どんな形であれアウトプットを出してほしい。論文発表でも観察会のコーディネートでも他の人間に影響を与える実績をアウトプットしてほしい。

黒田：あまり敷居が高すぎると応募がなくなるので、兼ね合いが難しい。

中瀬：10年間のゴールド免許にしたらどうか。

岩槻：理想的には3年や5年で切るのはではなく、資格を付けるとすれば、常にひとはくとの連絡が可能な状態にして、しばしばミーティングを持ち、そのミーティングに参加してもらう中で、自分はもうしんどくてやれませんかというなら返上してもらおう形が良い。何年かに一度認証し直すものではない気がする。

中瀬：アメリカの免許もそう、自分が運転できなくなると返上する。

岩槻：日本では一旦資格を持ったならその資格に意味があるが、地域研究員は資格に意味があるのではなく、そういう能力を地域でどう活かすかということに意義があるので、ほんとにしんどくなって活かせなくなったら返上してもらえばいい。

黒田：あまり続けてほしくない人のチェック機能はどうするか。特権意識だけ持っている方とか。

藤本：卒業という形を考えてもいいかもしれない。

横山：地域研究員で力をつけた人が食べていけるように考えないと、やってくれと頼まれてタダでして、いつまでもそのレベルだったら特に若い人はやめていく。そうするとつながりが切れてしまう。今の日本で一番ないのは、そういう活動が認められ仕事として成り立つシステムだ。

地域研究員の評価

黒田：良い活動をしている人を表彰する形が良いかもしれない。地域研究員間の評価システムを作り、あの地域研究員は模範になるなど評価し合い、良い人には岩槻館長から表彰状が渡される。そうするとプラスに働く。必ず1年に1回は、論文とはいかなくても活動報告を出してもらえば良い。

横山：活動ごとにメールで報告を送り貯めていけば、新たに書かなくてもすでに一冊の報告書になっている。

黒田：論文はひとはくと共同で、地域研究員は活動報告を出す。

大本：評価会は大事だ。セミナーなどを開催した後の評価会がシビアなものであれば、次のステップアップになるし、積み重ねていけば自分がどうしていけばいいか見えてくる。活動して

いく中の評価の仕組みもいる。

岩槻：数字の一人歩きではなく、日常的な活動の中でお互いが見合っていることが大切な評価になる。

櫻井：以前市民研究所でコーディネーターをしていた経験がある。ボランティアで研究員をしている人が、1年に1回の報告書作成やパネル展示をすると、報告書を書くことに半年くらい費やしてしまう。ミニ学者を作ることが目的ではないはずなので、例えばエコツアーの時に、案内した地域研究員がどのくらい子どもや大人に感動を与えたか、という切り口も必要ではないか。文章をうまく書けない人は評価されないので、地域研究員の活動を周りで見ている外部に伝える人も必要だ。アウトプットの方法を多彩にしてはどうか。

田中：報告書を書くのは、トレーニングによって半年が3ヶ月になることはあるか？

櫻井：毎年説明しても難しかった。ただ、学術研究に無理に合わせることはなく、その辺は事務局がうまくフォローしたら良い。

横山：記録にまとめる人は大事だが、自分達でやろうと思ったら大変だ。

岩槻：大学の評価基準はレポートの本数が対象になり、それはそれで足切りにいいが、地域研究員の資格は、確かにプリントされたものだけが評価対象ではない。もちろんプリントされたものがあつたり、メールで報告することが補償されたら問題ないが、それを補償されない人を自動的に切ってしまうのではなく、日常活動が豊かにされていることを本人や第三者の評価で入れられれば良い。機械的に評価するのではなく弾力的に。そのためには、ネットワーキングをしっかりとっておき、日頃の活動を理解していることが一番大事で、そんな多くの数ではないので、不可能ではないはずだ。

藤本：博物館職員が日頃付き合っている人数に、その人が常に付き合っている人数をかけた数字が最大限だろう。

田中：博物館研究員の評価もいる。

観光ビジネスとの接点

櫻井：観光ビジネスと結びつけてはどうか。西播磨地域は農業観光、林業観光にとっても良い環境なので、ひとはくが旅行会社と契約して人を集めてフィールド先を地域に作り、その説明を地域研究員にさせていただいたら、地域研究員がどれくらいの力を持っているかは即評価され分かる。良い講師の人もいれば、コーディネート力のある人もいるし、地域とのつながりが深くフィールド先を紹介してくれる人もいるだろうから、じかにフィードバックあり、お金も動けば嬉しいと思う。

藤本：そうになったら、地域研究員にひとはくの研究員は負けるね。

世良：今日は人づくり、地域づくりに話がいかなかったが、今の話にはとても興味がある。そういう部分で自分の能力を発揮したい、ひとはくと関わってみたいという人は絶対いる。それに対してひとはくはどう考えているかを聞いてみたい。

中瀬：地域研究員の働き先を県や地元働きかけ作ることが博物館のこれからの仕事になる。今の現状の中にどう入れていくかより、新しいことをする。ぜひやろう！